

法然上人讃仰会

2010

monthly
JODO

5
May

浄土

吹渡

生蓮



愛とガソリン

私のガソリンは ご飯でもあるけど
 母さん、父さん、友達、
 自分の身内の人たちから貰える
 愛情なんだって 知ってたかな？
 毎日毎日、感謝しながら
 生きてるって事も 知ってるかな？
 とっても とっても ありがとってガソリンを
 私から みんなに送るよ

表紙の人と書

北村宗介・書家

『浄土』2010年表紙の



1958年静岡県生まれ。北海道大学卒業。書詩家木村三山に師事、書、篆刻を学ぶ。
 宮部みゆき著『孤宿の人』、火坂雅志著『軍師の門』、第140回直木賞受賞山本兼一
 『利休にたずねよ』等、題字揮毫多数。
 筆一本書法ライブ「辻書法」を各地で公演。

5月の書

微風吹動

そよ風が吹いている。

極楽の世界は、気持ちのいいそよ風が
 吹いていて、その風がさまざまな宝石で
 飾られた並木や網を動かして、なんとも
 言えない美しい音が流れていると説かれて
 います。

そしてこの音を聞く者は、自然と仏を
 念じ、法を念じ、僧を念ずる心を起こす
 と続いています。
 (編集部)

大本山 増上寺

圓光大師堂

竣工



圓光大師堂は増上寺本堂（大殿）左奥に建立された。

写真提供／大本山増上寺



法然上人御身柄拝受の経緯

平成十八年

十一月二十四日（金）浄砂分祠之義（知恩院御廟）

（御浄砂を水晶の器に入れて

御影堂へ奉安）

十一月二十五日（土）浄砂遷座式（知恩院御影堂）

遷座式法要にて御浄砂拝受

（京都より帰着後）

増上寺三門前御身柄迎接式

大殿奉安式厳修

平成二十年

四月十日（木）

圓光大師堂用材洒浄式

（木材の検品と洒浄）

八月八日（金）

圓光大師堂地鎮式

平成二十二年

三月二十五日（水）

同上棟式

九月一日（火）

同上棟式

参照：法然上人の遺骨を納めた御廟の上を知恩院では「御浄砂」といい、増上寺では、成田前台下の命名により「御身柄」と呼称する



東京タワーを借景とする圓光大師堂（平成22年御忌にて）。



（上）正面奥に御身柄と法然上人像が祀られている。
（下）御身柄が奉安されている水晶の器。



大本山増上寺法主八木季生台下により動修された竣工式。

念仏道場としての役割
を果たすお堂となる。



左手奥の渡り廊下で学療と
つながっている。

浄土

2010/5月号 目次

カラーグラビア 大本山増上寺圓光大師堂	1
増上寺圓光大師堂について	田中勝道 6
平山郁夫先生を偲んで	佐藤美智子 8
会いたい人 桂米團治さん①	関 容子 14
連載小説 渡辺海旭 (14)	前田和男 22
響流十方	小村正孝 30
江戸を歩く	森 清鑑 34
法然上人をめぐる人々	石丸晶子 40
Jフォーラム	47
浄土句会	選者=増田河郎子 48
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよろう 51
編集後記	52



表紙題字=中村康隆前浄土門主
 アートディレクション=近藤十四郎
 協力=迦陵頻伽舎

増上寺圓光大師堂

について

大本山増上寺法然上人八百年御忌奉賛局執事

田中勝道

そもそも圓光大師堂建立の由縁は、知恩院前門跡中村康隆親王と当山前法主成田有恒台下との頂上会談により趣意が固まり、知恩院増上寺両山の佐藤諦学執事長、江口定信前執事長並びに両内局が前向きに取り組まれた結果、実現したものであります。

時は平成十八年十一月二十四日、祖山御廟より門外不出とされてきた法然上人の一握の御浄砂が、いよいよ当山へ御遷座が実った忘

れられない仏讃日となりました。

成田前台下は法然上人の御浄砂をお出迎えと同時に「御身柄」と命名、奉安のために御堂の建立を発願されました。

続いて御堂の名称についての検討を当山教監諸上人に諮問、現八木法主台下は当時教監職にあらせられ、名称の撰定に臨まれた御縁にも連なっておられます。

また現楠美執事長も当時、八百年御忌企画

推進委員の代表として、祖山での御淨砂讓渡式や遷座式にも出座、その一部始終を見届けられた一人であります。

さて成田前台下により命名の圓光大師堂の概要は木造平屋建、妻入人母屋造、本瓦葺、向拝軒唐破風付で正面三間、奥行六間、裏堂付、さらに内正面一間は吹放し向拝の意匠を施した伝統的な寺院建築で、約三十五坪の規模であります。

法然上人滅後七九五年目にして関東の地へ渡られた上人の「御身柄」は特別誂えの五輪塔にお納めし、特別な御厨子に奉安させていただきます。八木法主台下は毎日、大殿のお朝事に続き、圓光大師堂で御回顧を勤められています。

圓光大師堂建立の意図は「御身柄」の奉安もさることながら、一人でも多くの人が法然

上人に謁えられ、念仏を申していただきたいとの先師諸大徳の願いと、当山の八百年御忌奉賛の理念が込められています。

どうかお一人でも、同行と共にでも、念仏を申したいとの心が芽生えられたならば、一報の上、いつでもお出かけ下さるよう念じております。

圓光大師堂の参拝は年末年始、お盆月などを除き、当分の間、毎日午前十時より午後四時までとさせていただきます。

また当山に団参をお考えの場合は通常の参拝コースに加え、是非共、圓光大師堂でのひとときの別時をご検討下さいますようお願い申し上げます。

きっと法然上人が皆様のご参拝を心からお待ちになっていることでしょう。

平山郁夫先生を

偲んで

高德院鎌倉大仏責任役員

鎌倉文化振興財団理事

鎌倉ユネスコ

鎌倉アートフォーラムS会長

平山郁夫美術館評議員

佐藤美智子

昨年十二月二日、シルクロード画家として知られていた私の啓蒙する平山郁夫画伯は突如としてあの世に旅立たれた。外出先でその報に接した時には、まさかの思いで頭の中が真白になり、改めて先生は生身の人間だったのだと不思議な感覚に襲われた。あれからもう四ヶ月が経ち、魂の抜けたような状態からやっと先生の死を受け入れられる様になりつつあるところである。

先生との御縁は四十九年前に遡る。半世紀もの間、尊敬出来る先生との御縁を頂いた事は誠に有難く勿体ない事であった。

御縁は知人から姑にかかって来た一本の電話に始まった。

それは暖かな春の陽射しが縁側に明るく差し込んでいる穏やかな午後のひとときであった。「私は絵心がないから駄目よ」と電話口で姑は答え乍ら、横に居た私に「美智子さん、絵を習いたい？」と呼びかけた。「わあ！ お習いたいわ」何のことかよく判らないまま返事をしていたのだが、後から聞くと次のようないきさつであった。石草流家元であられた岩田清道先生が絵を習いたいからと前田青邨先生に御相談し芸大の若手の先生を紹介されたが、一人では勿体ないからと、五六人のお人を集めていらっしゃったとのことであった。聞けば日本画とのこと、戦後の西洋かぶれから日本画には全く興味もなく無知で白紙状態だったので「日本画なんて描けるかしら」と危惧し乍ら初めてのお稽古に出かけた。絵の先生と云えばそれ迄ベレー帽姿の絵描きさんのイメージしかなかった私は、最初に稽古場に現われた先生を拝見して先ずびっくり。色白のほっそりしたお体に白ワイシャツとグレーのスボン姿はサラリーマンの様であった。

「この人は今は無名だが、将来日本の画壇を背負って立つ人ですよ」と前田青邨先生から

ご紹介を受けたという平山先生は当時まだ芸大の助手でいらっしやった。線の細そうなお人柄に見えた先生は、いざ授業が始まると、大らかな温かいお人柄であった。

先生は広島で被爆された体験と、その後遺症に悩まされた時の死生感から玄奘三蔵の求法の旅に共鳴され、その前年に「仏教伝来」を描かれたばかりの時であった。そういう事すら全然知らなかった私だったが、奥様が「私のアラン・ドロン」と仰言った程のハンサムな素敵な先生を前にして、小学校以来筆や墨を持った事もなかった私は、すっかり緊張し、第一日目の「竹」を描く授業は手が震えて小枝が蛇の様に曲がってもうお手上げ状態。それを御覧になった先生は「大丈夫ですよ」とその蛇の上にさっと竹の葉を描いて上手に隠して下さった。私は真赤になり乍ら先生のお優しさと技量に感激したことを今でも鮮明に想い出す。その後、いつ何処でお会いしても先ず先生から飛び出すお言葉は「描いていますか？」の一言だけ。月並なご挨拶も何もなく、いきなり出てくるこの一言は本当に恐ろしく、先生の画家としての気魄を感じたものだった。

三十年も前になろうか、先生が北京で第一回目の展覧会をなさった時のことである。中国ではまだ皆人民服を着ている人ばかりの時代であったが、私もその開幕式に参列する一員に加えて頂いた。

先生の奥様が先生のことを鉄砲玉のように飛び出して行ってしまふ人と評されたように、先生が一時も休むことなくスケッチなさるお姿を旅行中毎日拝見した。ツアーのバス待ちのちょっとした時間でも無駄になさる事がなかった。夜はホテルのお部屋で休むことなく色をさしたり完成させられるとのこと。兎に角描く事が好きで一刻も描かずにはいられない先生であった。

その旅行は芸大の先生方が多く参加なさっていらつしやったので、私などは先生方と一緒にスケッチなどとても気恥ずかしく、鉛筆を持たずに行く積りでいたのだが、先生から「山の稜線一本でもいいから描きなさい」と言われ、又、北京博物館では初めて見る素晴らしい文物に、限られた時間内で一つも見逃すまいと欲張って駆け回っていた私に、「いくつ見ても同じですからね、これと思った処で立止って描きなさい」と諭された。え、？そんなものかしら？と思いつつ、立止って描いたのだったが、後になって、たった一本の線でも描いた事により、その風景がきちんとインプットされ、又その時代の息遣いや文化の特徴を捕える事が出来る事を知り、先生の短い一言がどれ程深い意味を持つかを知らされ、改めて先生の言葉少なくも実に端的な御指導に頭が下がった。

先生が病室でも最後までお花や窓の風景等を描き続けていらつしやったと伺い、先生がどのような深い思いで手を動かしていらつしやったのかと思うと胸がしめつけられる。

玄奘の足跡を追って一三〇回にも及ぶシルクロード旅行を重ねた先生は、二十世紀の終りに奈良薬師寺の玄奘堂にその壁画を納められたのだが、その間、シルクロードの絵を通して、日本人のルーツや佛教伝来の道への意識を啓発続けた。又、悠久の歴史を描き、多くの民族との交流を通して世界平和を希求し続け、武力でなく文化の力で世界を平和に導きたいと、文化財保存や文化交流で幅広い活動を続けられた。

御自宅にお訪ねする度に、先生は時間を忘れて文化財赤字構想等を熱っぽく語られ、アフガニスタンの動乱でちりちりになった貴重な文化財等も御自分の手で買取られ保護なさり、いつの日かアフガニスタンが正常に戻った暁には、いつでもお返しするのだと話していらつしやった。

ゴルフにも温泉にも見向きもせず、御自身は質素なお暮らしをなさり乍ら、多くの国々の文化財保存修理の為には惜しみなく私財を投じられ、唯ひたすら、画業と世界平和の為に活動された先生は、これ迄の画家にはない世界を見渡すことが出来る誠にスケールの大きな人物でいらつしやう。

ユネスコ親善大使であられた先生は鎌倉ユネスコ協会会長としても創設以来二十一年間お務め下さった。私も会員の一人として、先生の尊い御遺志を立派に継いで行かねばと今は皆で話合っているところである。

先生のご冥福をお祈り申し上げると共に、これからも先生のお導きを頂けますようにと祈るばかりである。

合掌



平山郁夫先生

昭和五十七年三月二日

大正大堂にて

記念講演会

平山郁夫

挿画は当会顧問真野龍海師によるスケッチに
平山郁夫氏がサインをしたもの。

NHK『こころの時代』を終え、いま 講師 町田宗鳳 法然上人に思う

広島大学大学院総合科学研究科教授

1950年京都市生まれ。

幼少のより、キリスト教会に通う時期もあったが、ふとしたことから14歳で出家。以来20年間、京都の臨済宗大徳寺で修行。34歳のとき寺を離れ、渡米。

のちハーバード大学神学部で神学修士号およびペンシルバニア大学東洋学部で博士号を得る。

プリンストン大学東洋学部助教授（90-98）、国立シンガポール大学日本研究学科准教授（98-00）、東京外国語大学教授（01-06）を経て、現在は広島大学大学院総合科学研究科教授、国際教養大学客員教授、広島大学環境平和学プロジェクト研究センター所長、平和科学研究所兼任研究員、平和希求委員会委員、オスロ国際平和研究所客員研究員（ノルウェー）、日本宗教学会評議員。研究分野は比較宗教学、比較文明論、生命倫理学。東京大学、名古屋大学、東京医科歯科大学、国連大学、聖心女子大学などでも教えた。

東京・名古屋・京都・岡山・福山・広島で座談会「風の集い」および「健康断食」を定期的に開催している。

会場 増上寺三縁ホール

6月25日(金)

午後1:30開場 午後2:00開演(3:30終了予定)

会費 1,000円

当会会員無料

問い合わせ先

—法然上人鑽仰会—

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

電話 03-3578-6947 FAX 03-3578-7036

連載

会いたい人
関 容子

桂米團治さん ①



撮影／タカオカ邦彦 撮影協力／パスタすべっついえ銀座店

小米朝改め米團治襲名披露で、全国巡演中（平成二十年）の米團治さんに、短いインタビューをしたことがある。毎日新聞の読書欄に「好きなもの」という名物コラムがあり、三つのうちの一つは本の好みについて語ってもらった、というもの。

米團治さんの好きなものは、①モーツァルト、②ドイツ語、③米朝の本、だった。①と②については追い追ひ詳しく紹介するとして、好きな本に抵抗なく父米朝師匠の『落語と私』をあげていたのがちょっと意外な気がした。

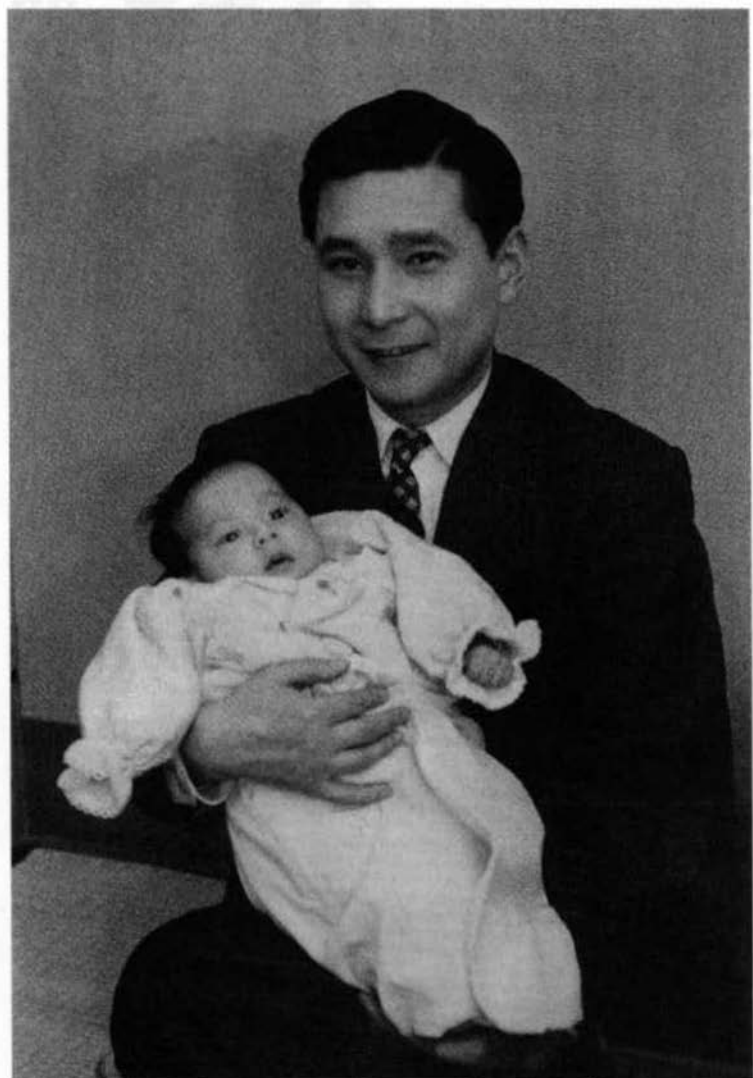
歌舞伎の世界では世襲制が当たり前みたいに考えられているが、落語（文楽も）にはあまりそうしたことがなく、お弟子たちの中へ御曹子が割りこんでゆくのは、父子ともどもかなり気兼ねのいるものらしい。

米團治さんが三十年間の小米朝時代のさまざまな心の葛藤を経て、父米朝の著書を読んだこと、この人の大きな成長が感

じられた。

米團治さんによると、「芸人は人さまのお余りで生かされてんので、という姿勢を父はいつも崩さない」そうだ。人間国宝になろうと文化勲章を受けようと、変らないところがすごいという。それで、哲学書やら文学書やら、難しい本をいろいろ読んだ揚句、結局『落語と私』に行き着いた。小沢昭一さんも、「数多落語論のある中で、もうこれ一冊で十分、と言いたい程の決定版」と、その解説で書いている。

米團治さんが襲名披露公演の恵比寿ガーデンプレイスのホールの楽屋で、別れ際にこんなことを言ったのが強く印象に残っている。「口上に居並んでニコニコしてる父が何だかとても神々しく透明に見えることがあるんですわ。このままだんだん落語の神様になっていくのかな、と思えるくらい。あんなにきれいに老いていく人というのも、なかなかいないのと同じですやろか」



生後間もない頃、米朝さんに抱かれて／1959(昭和34)年(『子米朝』桂米團治著より)

米團治さんにもっとたくさんのお話が伺いたくなって、その場所を提供してください。たの板橋の名刹、東京大仏乗蓮寺さんだった。まず、米團治さんはどんな少年だったのか。「ぼくは長男で、二つ年下の弟は双子なんです。が、いやな兄貴だったと思いますよ（笑）。というのもぼくは難産のすえ逆子で生まれて、斜頸で先天性脱腸で、八割方死ぬと言われてたんで大事に可愛がられて……特にお祖母ちゃんから過保護にされてぬくぬくと育ったんですけど、弟が急に二人もできなかったんで、それまでおねしょなんかない子やったのにわざとおもらしをしたりして、親の注意を引くためにね。学校へ行くようになったら、弟の片方を味方につけて片方をいじめるとか……いやな兄貴でしょ。しかし高学年になると、ある日突然二人から逆襲されることになりました（笑）。ぼくは子供のころは無口でおとなしかったんで、むしろ弟の透（とほ）のほ

うが勝ち気で腕白で嘶家向きかもしれないかった。母親がかねがね、あんたら三人、男やからな、誰か一人くらい父親の落語の財産を受け継いだら？ と言っていました。父にはいろんな才能があつて、何しろ学究肌の嘶家と言われた米朝ですから。結果的には学術的な面を弟たちが受け継いでくれました。透は高校の国語の先生で、渉（しやう）は考古学者です。ぼくが嘶家にならなかったら、二人のうちどっちがなつたかもしれませんけど、明兄（あき）ちゃんになつたからもうええ、ってことになつたんでしょ」

襲名口上（しやうめいこうじやう）のとき、兄弟子に当るごぼさんが、明少年のこんな話を披露していた。弟子入り志願のごぼさんが、初めて米朝邸を訪ねて応接間に通され、出されたお饅頭を前にコチコチに固まっていると、ランドセルを背負った色白の男の子がヒョッコリ入ってきて、「あれ、うまそうやな」と言うなり、その饅頭をパツクリ食べて消えてしまった。そ

のあと師匠が現れて、空っぽになっっている皿がとても恥ずかしかった、という。

「そんなことあったかもしれませんわ(笑)。
しかしぼくが大学一年のとき、枝雀兄さんやざこば兄さんが父に言い出してくれなかったら、ぼくが噺家になっっていることはあり得ませんでした。高校のころ、ぼくは噺家になりたい、と言つて、一度だけ父にアタックしたことがあるんです。すると膠にべもなく、『やめとけ、向いてない』と一蹴いちそされました。これが他人やったら何度も何度も門を叩くんでしょうけど、私はどこを叩けばええんや? と思つて(笑)。それにぼくはサッカー少年で、ドイツ語が好きで、絵画も音楽も好きで、いろんな選択肢があつたんで、逆に将来の方針が定まらないまま大学へ進学してしまつたんです。でも当時内弟子だった一つ年上の米二兄さんから、大学卒業してからでは遅いで、と言われて迷つてました」

そのころの米朝師匠と言えば「飛ぶ鳥を落

とす勢い」で、レコードを出せばよく売れるし、ゴールデンアロー賞など受賞続きだし、マスメディアでも常に話題になつていた。

「子供ながらに親を尊敬してましたね。父はかなりの酒好きで、弟子たちと車座になつて賑やかに飲んでる風景をいつも眩しく横から眺めてました。ある日、その場に手招きされて、枝雀兄さんがまだ小米時代、『師匠、明君を噺家にしましよな』つて言い出して、まだ朝丸を名乗つていたざこば兄さんも『そやそや、やつたらええ、やつたらええ』つて応援してくれた。すると父が苦虫を噛みつぶすような顔で『まあ噺家の倅がネタの一つもでけへんのも不粋やし、そんなら一つだけ教えます』。すると枝雀兄さんがすかさず『ほな、名前決めましよ』と言つて、それから二時間ほど話し合つた結果、『小米朝で行こ』という枝雀兄さんのひと言で、その平凡な名前に落ち着きました。この瞬間、ぼくの噺家人生が始まつたわけです」

この運命の日が昭和五十三年八月で、十月にはもう初舞台。異例の早さだった。

「普通、入門から早くて半年、遅い人で一年後が初舞台です。周りからは『やっぱり師匠の息子やしな』と言われて恐縮しながら、必死でネタをおぼえました。米朝一門では、最初に教わる落語は『東の旅、発端』と決まってるんです。左手に小拍子、右手に張り扇。見台を叩きながら調子よくしゃべる上方特有の旅ネタです。稽古は、まず出だしの三分くらいまでを師匠と一対一で教わる。で、次の稽古日に、『この間のこと言うてみ』『ハイ』言うて、つかえると、すごい罵声がとぶんです。『お前はほんまに、おぼえが悪いなあ』、と父独特の言い方で（笑）、心の底からつくづくあきれるように言われて、そうやなあ、と実感しました。噺家になったとはいいいけど、最初のうちは焦りと後悔の連続でした。ひよつとしたら三十年間、焦りと後悔が続いていたのかもしれない（笑）」

その三十年間もの長い迷いのトンネルを抜けたのは、自分に米團治という名前が降りてきた瞬間だったという。

「父はとにかく東京へ出たくて、でも姫路の神官の息子ですからね、当時、神道の関係者は優遇されたという大東文化学院に入るわけです。目白あたりに下宿して、通学と寄席通いを両立させ、十代の中川清少年は大阪にはない芸にふれるんです。ある日、正岡容と書いてある表札を見て、ふと入った。落語、浪曲、講談と、寄席芸に関する正岡先生の本を父はよく読んで、尊敬してましたからね。いつしか弟子となり、正岡先生から『君が上方落語を盛り上げなさい。そのためには米團治（四代目）に入門しなさい』と、米團治師への入門をすすめられたそうです。正岡先生は父にとつての大恩人。その正岡先生が亡くなられた直後、一か月後くらいにぼくが生まれてるんですよ。これは先生の生まれ変わりや、

明少年（米團治さん・中央と、その双子の弟、遼少年と渉少年）
（子米朝・桂米團治著より）



と両親が思うほどの近さで。父は減びかけていた上方落語を着々と全国区にして、自身もいろんな榮譽に輝いて……、でも米朝にできなかった唯一のことが、師匠米團治の名前を継げなかったことなんです。それをぼくがமாகされたんやな、この日のためにぼくは米朝のところに生まれてきたんやな、と思ったらゾクゾクツとなって、嘶家になったことの意味がここできるようわかった気がします」

米團治襲名が決まるまでには、かなり紆余曲折があったらしい。

「最初はざこば兄さんから話がきました。いつまでも小米朝ではアカンやろ、名前、変え変えって、例の調子で（笑）、米朝になれっ

て言うんです。えーっ!! じゃあ親父は？と訊くと、八十八やそはちはどないや、って。これは父の俳号です。米という字を分解して八十八。でもこの案は父が承知しませんでした。父は生涯、米朝のままにいるつもりの方ですし、もし仮りにぼくが米朝になったとしても、親父の『米朝全集』はあるわ、DVDはあるわですから、ぼくの存在は薄れてしまう。余計にしんどくなるだけ。それで立ち消えになって、二年後。今度はぼくが八十八にならないか、という話が持ち上がり、またさこば兄さんが、それええがな、お前が今、うんと言ったら丸うおさまる、うんちゅうて、うんと。やたらうんうん言って迫られたんですが、俳号を芸名にするんでは襲名とは言えへんし……とぼくは乗り気になれなかった。それから二年後にまたさこば兄さん。なあ、頼むわ。東京見てみい。正蔵、木久蔵そのうちに三平と、襲名続きで盛り上がつとるわ。うち見てみい、葬式ばかりやってるがな、と言われ

て。で、事務所から、たとえば米團治ならどうですか？と訊かれたとき、ぼくの心がふつと動いたんです。でも、父の師匠の名前を継ぐわけにもいかんやろ、と言うと、翌日、さこば兄さんが来て、お前、米團治やつたらええのか？って。それですぐに記者発表。さこば兄さんはぼくを襲名させることが師匠への恩返しになる、と思ってくれてたらしいんです。とにかく熱心でした」

襲名が決まってから、米團治さんが卒業した関西学院大学の古典芸能研究部の顧問として先代米團治が深く関わっていたことを知り、これにも縁の深さを感じたという。

「米團治という名を初めて聞いたときに、なぜかなつかしい気がしたんです。父が正岡先生と巡り会って、先代に紹介されて……全部見えない糸でつながっているんですね。米團治という名前の持つすごいエネルギーを、今ひしひしと実感しているところです」

(つづく)

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月

を求めて

前田和男

第十四回

異教のよきライバル
賀川豊彦 その1



二人の共通する 奔放闊達な留学生生活

昭和二六年（一九五一）二月二五日、日曜日の午前九時前。当時は新聞とともに数少ない情報ソースだったNHKのラジオ放送を書斎でかけっぱなしにして聞くとはなしに聞いている男がいた。世界で四百万部を超えるベストセラー『死線を越えて』（英語タイトルは“BEFORE THE DAWN”と“BEYOND DEATHLINE”の二種がある）をはじめ多くの著作と活動で、今やガングーとならぶ「東洋の聖人」として世界中にその名を知られたキリスト教社会運動家、賀川豊彦である。

賀川はこのとき円熟の六三歳。ノーベル平和賞の受賞さえ噂されていた（つい最近ノーベル賞選考委員会が「守秘期間が過ぎた」として明らかにしたが、賀川は戦後直後、ノーベル平和賞（昭和二九―三二年四年連続）の

みならずノーベル文学賞（昭和二二、二三年度の候補にもなっていた）。賀川は、前年は一月の英国を皮切りに欧米諸国で講演・伝道活動を展開、暮れも押し迫った一二月二八日に一年ぶりに帰国。今年は日本にじっくり腰をすえて執筆にいそしみながら充電につとめるつもりだった。この日の賀川は「活動の拠点」としている東京世田谷は松沢教会の敷地内にある書斎で、十時からの礼拝のための説教の構想を練っているところだった。賀川の説教は、ほかの牧師たちとちがって、聖書に拘泥・終始しない。聖書の文言はいわば導きの糸（イントロダクション）であって、話が「現世の事象」のあちこちに飛ぶ。それが信者たちを惹き付けてなかなか人気があった。さて、きょうはマタイ伝から語りはじめるとして、どこへ飛ぼうか。立体農業（賀川が提唱した有畜循環型農業で、現在の持続可能な有機農業の源流の一つとされる）の話か、セツルメント活動の話か、はたまた焦眉の課

題である占領下日本の独立と講和条約の話にするか…。

そう思案をめぐらせているところへ、ラジオから「光を掲げた人々、今回は新しい時代の聖者、渡辺海旭」と旧知の名前が語られて、賀川は思わず「おっ」と声をあげて、耳をそばだてた。

海旭がなくなつてずいぶんたつが…たしか昭和八年（一九三三）だったか。日本が国際連盟から脱退、ドイツではヒトラーが政權に就いた年だ。思えばあれから歴史の舵は不幸な世界大戦へと切られたのだった…。と、賀川の回想をぶつんと断ち切るようにラジオドラマは、一年にわたる海旭のドイツ留学のエピソードではじまった。海旭が釈迦の「悟りの日」に留学生仲間とビールジョッキで祝杯を上げ、オペラ観劇に繰り出すというくだりに、賀川は、「こんなにも奔放闊達な御仁だったのか」とあっけにとられた。

渡辺海旭の名は禁酒運動関係で宗派を超え

てよく知っていたが、石部金吉屁もひらずの堅物の印象だった。また、どちらも「宗教業界」では超有名人だったので、聞こえてくるのは「立派な業績話」かその反対の「誹謗中傷」ばかり。いずれにせよ人間ばなれた人物像として印象づけられていたので、ラジオドラマとの落差は大きかった。

しかし、賀川には、異国の地での奔放闊達ぶりがどこか自分に似ていて、かえって海旭を身近に感じながら、自らの留学体験の棹尾を飾るエピソードを思い起こしていた。

逆境の幼少年時代に 信仰への目覚め

大正三年（一九一四）、第一次世界大戦が始まった年。ちょうど海旭のドイツ留学から遅れること一四年で、賀川二六歳のときだった。賀川は奨学金をもらって勇躍アメリカ東海岸の名門アイビーリーグの一つ、プリンストン大学に入学、三年の研鑽でプリンストン

神学校の学位を取得するが、奨学金が底をつき、帰国を決意。その旅費を工面するためにユタ州の日本人会の書記となった。

ユタ州では日本人の多くが現地のモルモン教徒たちとともに甜菜（ビート）栽培に従事していたが、農場主は両者の敵対につけいて搾取をつづけていた。賀川は人種・宗教差別を巧みに利用した雇い主の分断支配だと見抜き、日本人とモルモン教徒の間に入って小作人組合を結成、ストライキを執行して賃上げをふくむ労働条件の改善を勝ち取った。これで日本人側だけで五万ドルもの「増収」となり、賀川はその一部を「報酬」として受け取って旅費にあて、帰国したのである。

キリスト者としてはいささか破天荒な所業ではあったが、これによって賀川は旅費を得ただけでなく、後にキリスト者でありながら労働運動や農民運動、生協運動の指導者という社会活動家となる貴重な体験を積んだのである。

「あれは実に痛快だった」と回想にふけっているうちに、はて、そもそも海旭との出会いは誰がつくってくれたのかと首をふり、そう、そう、磯村英一君だったと思いついた。

磯村とは後に東洋大学学長となる都市社会学者であり、同和対策事業の生みの親としても知られるが、磯村が東大生のとき、自身もキリスト者であることから賀川のセツルメント運動に傾倒して知己を得た。その後、磯村は東京市の職員となり、賀川を東京市の嘱託に招くなどの便宜をはかり、戦後も付き合いがつづいていた。

その磯村に、いつだったか、「自分が社会事業に目覚めたのは芝中学在学中の校長、渡辺海旭の影響だといひ、その海旭と賀川先生は生い立ちも似ています」といわれてそのまま聞き流していたことを思い出した。賀川は書斎の中から「人物年鑑」を取り出すと、渡辺海旭の項を繰り、その履歴を目でいった。

渡辺海旭は、浅草下町の職人の子供に生まれるが、家が貧しく、一二歳で小僧奉公に出された。一三歳で小石川の源覚寺住職（西光寺前住職）端山海定に才覚を見出され、得度をうけ、一五歳で浄土宗学東京支校（現在の芝中・高校）に入学、六年間を優等で卒業。さらに上級の浄土宗学本校全科（後の宗教大学で現在の大正大学）を優秀な成績で卒業。いきなり宗門機関紙「浄土教報」の主筆に抜擢される。内地留学生に任じられ比較宗教教学を修めたのち、明治三三年（一九〇〇）、二八歳で浄土宗第一期海外留学生としてドイツはストラスブルグ大学へ留学。一年の学生生活でサンスクリット語、チベット語、パーリー語を学んで比較宗教教学を修め、帰国後は明治の近代化のなかで伝統仏教の再生・再興に貢献…。

ここまで読みすめて、思わず賀川はつぶやいていた。生まれた年は海旭が一六歳上だ

が、たしかに自分と生い立ちは似ていると。

賀川は明治二十年（一八八八）徳島の名門庄屋の「大旦那」が芸者に生ませた「妾の子」であった。父方に引き取られ正妻に育てられるが父が早世。中学時代には家が破産。その窮状を救ってくれたのが徳島の米人宣教師、ローガン博士だった。博士から洗礼をうけ、学資の援助もうけて明治学院へ進み、一日一冊読破を自らに課して勉学に励む。卒業後は宣教師となるが、伝道中に結核で吐血、死の淵をさまよう。九死に一生を得た賀川は、生涯を恵まれない人々に献身することを決意、神戸の極貧スラム街へ単身入る…。

このように賀川も海旭も幼少時代は決して恵まれなかったが、どちらも利発で勉強好きだった。そして、賀川には宣教師のローガン博士、海旭には浄土宗の住職という「救いの神」が現れる。二人とも導きの師を得て、信

仰の世界へ入る。賀川が洗礼をうけたのが十五歳。海旭が得度したのが十三歳。どちらも宗教家として一生を捧げることを決意、その道を邁進した。

なるほど、人生の進路を決めるまでの幼少年期・青年期はお互いによく似ているなあと、賀川はふたたびつぶやいた。

ともに

社会事業に専心

似ているのは幼少期から青年期だけではない。青年期以降の人生の進路においてきわめて似通っている。それは、信仰に基づいた「社会活動への献身」である。

前述の渡辺海旭の履歴の後には以下がつづく。

宗教大学（現大正大学）、東洋大学の設立・運営にかかわり、近代化が急がれた日本のために、有意な人材を数多く育てあげた。また、近代化の矛盾のひとつである労働者救済運動

に宗派を超えて取り組み、「社会事業」という言葉は海旭の「造語」だといわれている。

賀川豊彦もしかりである。生涯の「憧憬者（アドマイアラー）」であった評論家の大宅壮一は、次のように評している。

「明治・大正・昭和の三代を通じて、日本民族に最も大きな影響を与えた人物ベスト・テンを選んだ場合、その中に必ず入るのは賀川豊彦である。（中略）大衆の生活に即した新しい政治運動、社会運動、組合運動、農民運動、協同組合運動など、およそ運動と名のつくものの大部分は賀川豊彦に源を発しているといっても決して云いすぎではない」

これは、大宅が同年の「文芸春秋増刊号」（四月二五日号）に寄稿した「世界人・賀川豊彦の秘密」の一部だが、賀川は事前に大宅から概要は聞いていた。辛辣な批評が売り物の大宅がこれほどほめるとはよほどのことだ。賀川には面映くもあったが、自分が宗教家を超えた社会活動家であることには、大いなる

自負があった。海旭も宗派はちがっても信仰にもとづく社会活動をしている。そこが似通っているのが、生い立ちが似ていることよりも賀川は嬉しく、親近感を覚えた。

これも磯村からだったか、海旭が優れた社会活動家であることを教えられ、実は「接近遭遇」していたことを思い出した。それは関東大震災、場所は深川であった。ラジオドラマでは海旭と弟子とのやりとりを紹介していたが、賀川はドラマそっちのけで二人の「出会いそこね」に回想を馳せた。

あのときはとにかく無我夢中だったと、賀川は往時を振り返った。「事」が起きると考える前に身体が動いて走り出す。走っていると不思議なことにアイデアも湧いてくる。関東大震災のときがまさにそれだった。神戸にいた賀川は、関東大震災を伝える新聞の大見出しを見るや、その日にYMCAの仲間には非常召集をかけ、その日の午後には、神戸出帆の山城丸に乗り込んで、三日夜には横浜につ

いた。

入るなら、もっとも被害が深甚で未だ救助の手が差し伸べられていない地域にと、賀川一流の嗅覚とネットワークでそこが深川地区であることを嗅ぎ当てた。くしくも海旭が住職をつとめる西光寺のある地域だった。まずは「救援センター」をつくらなければならぬ。賀川は敷地も広く被害もさほど受けていない寺をみつけると、頼みこんだが断られ、仏教徒とはかくも丁見の狭い輩かと失望を覚え、近くの焼け跡にテントを張り、活動の拠点とすることにした。その足で関西へとんぼ帰りし、全国遊説をしながら、集めたカンパを東京へおくり、馬島 率いる医師軍団を呼び寄せて無料診療を行うなど、あつという間に「一大救援センター」を充実。後にここが東大セツルメントの「発祥地」ともなり、賀川にとって西の神戸に倣ぐ東の活動拠点ともなるのである。なお、その中には前述の磯村英一と東大同級の大宅壮一もいて、賀川の活

動に共感し支援をつづけた。

このとき賀川と海旭の二人は一面識もなかったが、実は接近遭遇していたのだった。この深川の地で、すでに海旭は賀川が神戸の「貧民窟」で行っていたのと同様の「救貧活動」をはじめていたからだ。

賀川が神戸新川地区で救貧活動を開始するのは明治四二年（一九〇九）だが、ほぼ同じ時期にドイツ留学から帰国した海旭は、ヨーロッパの宗教（つまりはキリスト教）が貧富のすぐれた調整者であることを目の当たりにし、日本では仏教徒こそこれを担うべきだと提唱、明治四三年、法然上人七百年忌の記念事業として、海旭の地元である深川に無料の職業紹介所と宿泊所を開設、労働者の慰安施設も併設、それらは「浄土宗労働共済会」と名付けられた。ちなみに、開設七年後の大正六年度の実績は宿泊者三万六千人強、開設時からの累計は約二二万人にもなった。これは海旭が留学時にドイツでのセツルメント運動

「労働者の家（アルパウテル・ハイム）」から学び取ったものだった。この浄土宗労働共済会はさらに陣容を拡充、労働者のために夜間学校、仏教界では本邦初の朝鮮人のための学校「明照学園」、簡易図書館、児童衛生相談などが加わって発展をみていく。

しかし、関東大震災で、海旭は自坊の西光寺とともに、海旭が十余年かけてつくり上げた貧者救済の「浄土宗労働共済施設」のすべてを失った。それでも海旭は、校舎の一部が焼け残った校長をつとめる芝中学に起居、即座に深川周辺の救済施設を復旧させながら困窮する人々の救援にあたった。そして、突貫工事で、三ヵ月後の年末には六〇坪の労働合宿所の復活にこぎつけるのである。

「救貧はもっぱらキリスト教の専売」と思っていた賀川は、そのことを後に磯村から知らされて、仏教徒でもこれほどの大人物がいることに驚嘆するとともに深い敬意を覚えたのだった。

（この項つづく）

魚鳥に七箇日のいみの候なる事、さもや候らん。え見およばず候。
地体は生きとし生けるものは過去の父母にて候なれば、食うべき
事にては候わず。

(法然上人「往生浄土用心」)

魚や鳥を食べた場合には七日間の物忌みをしなさい、と言われていますが、何に
書かれてあるのか見たことがあります。しかし、生きとし生けるものはみな、
自分の過去世における父母の生まれ変わりかもしれないのですから、本来は食べ
るべきではありません。

絆、どうなる…

ここ一年ほど、小生の稿はお墓にまつわる話が多くなってしまったが、それが何かの作用を及ぼしたのか、しばらく前、横断歩道で信号待ちをしていると、すぐ後ろからこんな会話が聞こえてきた。

「お墓、どうしようかと思って……。普通は○○家って、苗字が彫ってあるでしょ。でもうちの場合どうなのかなって、悩んでるのよねえ」

「そっかあ」

「人に聞いたら、苗字じゃなくてもいいらしいんだけど。うちは日蓮宗だから南無妙法蓮華経って彫ればいいって言われたんだけどねえ。どうしよう…」

「そういえば、そういうお墓、あるよね」

女性ふたり。友達だろうか。声からするに三十代から四十代くらい。信号が青になり、雑踏が声をさらったため会話の続きはわからない。

どうやら、一方の女性がお墓を新たに用意する必要があるようだ。従来一般的だった「○○家之墓」とするのは、彼女の場合は都合がよくないらしい。なぜかはわからない。一人っ子なのか、ほかに事情があるのか。

このようなケースがここ数年増加していると言われる。小生の周りにも、自家のお墓の将来を案じている人は少なくない。少子化という現象もあろう。墓

地というものに対する価値観の変化もあろうし、その土台には、人々の死生観、来世観の変化など複合的なからみが横たわっているように。

翌日の朝刊、こんな見出しの記事が目に入った。「廃れる先祖への敬慕」(三月五日 産経新聞朝刊)。

「二〇××年、お彼岸。かつては家族連れが訪れ、お墓の前で神妙に『お参り』していた日本ならではの光景は、過去のものとなった。雑草も生え放題で、代々の先祖が眠る『〇〇家』と記された墓は見捨てられたまま、もう何年にもなる。『無縁仏』同然で誰にも見向きもされなくなった墓が全国各地にあふれているのだ」

寒気を催すような書き出しである。しかしこれは、先ほどの女性のような事情からのことではない。

実はこれは、数年前から賛否両論渦巻いている「選択的夫婦別姓制度案」が法制化された場合の「未来予想図」。もとより本欄は、国の政策を吟味する場でも、よしあしを判ずるのが目的でもないから深入りは避けるが、一介の僧侶として愚考するに、やはり大きな危惧を抱いてしまう。

それは単に寺というものの役割機能が危うくなるというに留まらない。「個

人の自由」を標榜して安易に別姓を選べば、真っ先に影響を受けるのは子どもだろう。「ボク(わたし)はお父さんとお母さんの子」という一体感が希薄になりはしないか。案によつては兄弟姉妹が違ふ苗字になることすらありえるという。

親の側も「私たちの子」という気持ちが強くてない可能性はないか。離婚も今よりしやすくなるのかもしれない。育児、教育、よい家庭づくりに対する意気が低下したりはしないか、子どもは自己の寄る辺を確認できないまま成長しはしないか。いのちの軽視化は止まらず、結婚や家族というものをネガティブ視する傾向も増長するのではないか……。

不安は尽きない。もっとも、「法制化されないと困る」という人がいる現実も認め、その声に耳を傾ける必要はあろうが。

とりあえず、この論議については注視するしかない。しかし、これに限らず現代という社会は、さまざまな事情が親子家族の絆を弱まらせていく、そんなきっかけが多いように感じる。そうしたなか、先ほどの女性は、絆を大切にしたいとの思いがあればこそ、悩んでいたに違いないと思うのだ。

魚や鳥をさえ、過去世の自分の父母の生まれ変わりかもしれないとする法然上人なら、こうした状況をどう見られているだろうか。

(小村 正孝)

第三十四回

江戸を歩く

両国橋から本所へ



森清鑑

大江戸ウォーカー

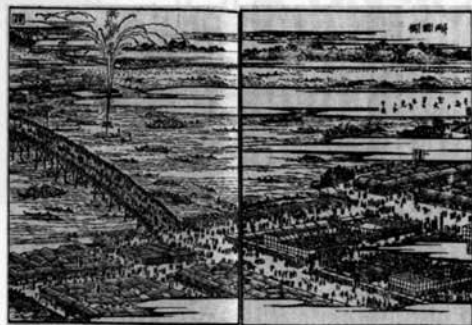
茶屋などである。見た目には広い道がこの密集地帯を囲んでいるように見えるが、広場が造られた時には、これらの店はなく、全体が広い空き地であった。その後、次第に広場の中央に葦簀張りの店ができ、ついには一大歓楽街が形成されていったのである。店が何故、簀張りで、できているのか。危急の際にはいつでも撤去できるようになっているからである。雪旦の絵は両国の川開き、花火の日の光景を描いているので、特に人が多く、道も店も人で一杯である。それでなくても、ここはなにしろ人が多い。江戸一番の賑やかさ。芝居小屋の幟が高くはためき、見世物の塔が立ち、水菓子（西瓜や瓜が人気）、焼きイカ、団子、冷や水売りなどの屋台が所せましとならんでいる。そして両国橋の大川縁は舟で一杯。広小路の南側は船宿が密集している。辺りは威勢の良い江戸っ子の声が飛び交っている。

明暦三年（一六五七）、本郷本妙寺などか

ら発した火は、江戸城天守閣はおろか江戸市中を焼き尽くし十万余の死者を出した。明暦の大火（振り袖火事）である。大川に逃げるも橋はなく、浅草御門は閉鎖され、逃げ場を失った人々が火勢に焼死した。幕府は、火事の避難場所（火除け地）として、ここに広小路を設け、それまで家康以来、防衛のため、千住大橋しかなかった大川に両国橋を架け、対岸の葭の原にすぎなかった広大な湿地帯を切り開き、多くの人々が住める町造りに着手した。いわゆる本所・深川の一大開発である。

両国橋

両国橋が架けられたのは、万治二年（一六五九）のこと。長さ九十四間（約二百メートル）、幅四間（八メートル）。千住大橋に次ぐ二番目の橋であった。幕府はこれを大橋と名



◆江戸名所図会 花火、両国橋、広小路の賑わい。両国橋の左右は將軍棧橋。左下は同朋町と吉川町の家並み。橋の手前は葦簀張りの小屋群。右中央は船宿と米沢町。中央右隅に元柳橋が見える。

付けた。しかし、江戸初期には大川（隅田川）までが武蔵国江戸であり、大川対岸から先は下総国。橋が架けられたときにも江戸の人々はそう思っていたので、この橋を二つの国を繋ぐ橋、両国橋と呼ぶようになり、いつしかその名が定着した。その後、両国橋は何度か架け直されたが一時、元柳橋の南に新大橋として架けられたのを除くと江戸時代、現在の両国橋より少し南に位置している（現在の橋は嘗ての將軍棧橋の処）。

両国橋に人が絶えることはない。行き交うあらゆる階層の江戸市民、馬に乗った侍。この橋は長さといい、風格といい、江戸っ子にとっては別格の存在であった。多くの画家が描いている。広重も北斎も例外ではない。北斎の富嶽三十六景は、御厩河岸（厩橋）辺りから両国橋の右上に聳える富士を描いているし、広重は各方向から、この橋を描き、特に納涼花火の図は名高い。

今日も続く両国の花火は八代吉宗の時、大

飢饉、コレラで亡くなった多くの人々を弔い、疫病払いを兼ねて享保十七年（一七三二）五月二十八日に始まった。大川の川開き。これはまた八月末まで江戸っ子が自由に暑い夏の納涼を楽しんでも良いという合図でもあった。現代の多彩な

花火とは比べようもないが、それでも夜の静寂に咲く、橙色の花は当時の江戸市民にとっては喻えようもなく、江戸中の人が橋の両岸に押し寄せた。橋の上から見る花火は別格で大勢の人々が感嘆の声を上げ、金持ちは船宿からあらゆる種類の舟を借り、橋のふもとに集まった。花火の費用は船宿、茶屋、料理屋が出費。浅草横川町の鍵屋、両国広小路の玉屋が大川の上流、下流に分けて花火を打ち上げる。混雑した舟を縫うように料理を運んだ「うろうろ舟」が走り、芸人は音曲を奏で走



◆右下神田川、柳橋。渡ると浅草下平右衛門町。対岸は本所。

る。「ウロウロする」とか歌手の「流し」の言葉はここから出た。

薬研堀

大変な混雑の中、広小路から、右に船宿、米沢町の商家を見て大川伝いに南に歩くと元柳橋がある。宝永年間（二七〇四～一七一〇）には神田川に架かる、現在の柳橋は無く、ここが柳橋であった。それ以後に現在の柳橋が架けられ、元柳橋になったのである。元禄時代、薬研堀はこの橋から鉤状に米沢町の南を囲むように在った。その前の貞享年間（一六八四～一六八七）には米沢町は無く、薬研堀を挟んでの広大な敷地は幕府の谷之御蔵という、御米倉であった。つまり薬研堀は米の運搬のために、この蔵地の中央から割って入って造られた堀であった。元禄になると幕府米倉は移転し、跡に米沢町ができ、明和八年（一七七二）の地図では神田川に現在の柳橋が架けられ、米沢町の南に接する薬研堀部分

は埋め立てられ、そのまた南は武家屋敷となっている。埋め立てたとき薬研堀の構造が漢方薬作りで用いる、原料を砕くV型の薬研に酷似していたところから人々は「薬研堀」と

呼ぶようになった。江戸後期にはこの埋め立て地を含め、西南に薬研堀町が出現している。米沢町には大きな商家が立ち並び、佐伯泰英の人氣小説「居眠り磐音江戸双紙」に登場する「今津屋」の舞台になっている。江戸後期まで薬研堀の大川元柳橋から西に入り込んだ部分は残っており、その北に接する米沢町三丁目には唐辛子発祥の老舗「大木唐がらし」があった。また有名な薬研堀不動は埋立地の上に立っている。この辺りも江戸時代、さかんな賑わいを見せた処である。



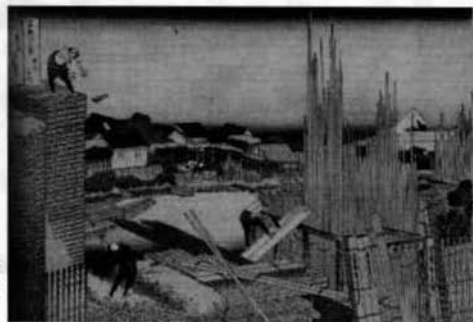
◆広重「東都両ごく」対岸の本所から見た両国橋と富士

本所、深川の開拓

本所、深川は江戸の新開拓地である。一言で言えば武家のニュー・タウンの造成であった。葭の生える湿地帯を人工的に造成し、多くの旗本、御家人が住む町に造り上げた一大土木工事。それは下総国であった地域を武蔵国江戸に取り込む工事でもあった。

江戸の前、利根川は江戸湾に流れ込んでいた。暴れ川の余波はこの湿地帯を常に脅かしていた。そこで利根川の流れを現在の銚子に向ける大工事、いわゆる瀬替えが行われる。この土木工事は九十年の歳月をかけて承応三年（一六五四）に完成する。このため水被害は減少し、荻荻が繁るデルタ地帯となる。こうした背景があつて、明暦の大火（一六五七）をきっかけに本所・深川の町造りが始まる。開拓事業は六十年後の享保四年（一七一九）に完了。深川はまず縦横に巡る堀の掘削から始められる。大川の両国橋南から中川まで東

西に伸びる川の掘削。これを江戸城あるいは大川に對し、立ての位置になるので、堅川と名付け、南北に大横川（江戸城、大川と並行して流れ、北は大川に繋がる）を造り、さらに堅川と並行して北に細い南割下水を、そのまた北に北割下水を設ける（これらはいずれも横川に流れ込んでいる）。この工事は、徹底的な、河川の氾濫に備えた排水処理である。そして掘削した土壌を地盤造成に使い、碁盤の目のような町を形成する。こうしてできた深川の町には、旗本、御家人の家々が並んだ。



◆北斎富嶽三十六景「本所堅川」中央左、材木の後ろを堅川が流れる。

連載再開

法然上人を
めぐる人々

熊谷直実

◆ 第一回 ◆

の
回心

石丸晶子

挿画・鈴木奈緒

建久四年（1193）三月。春の昼下がりであった。

洛内のどこもかしこも桜の花霞につつまれ、花の香りにつつまれている。

「尼御前さまはお出でかね」

弥太がそういつて吉水の草庵別棟にある台所に入ってきた。

別棟といっても法然上人と信空たち七人のお弟子が日頃起居する庵室もわずか三間の板葺きならば、庵室の裏手に、離れて樹木の間に建つこの別棟も、広さだけは広いが粗末な板葺きである。

平家一門が壇ノ浦に滅んで八年。ここ数年、浄土のみ教えを伝え聞いて吉水の草庵を訪れる僧俗貴賤の男女の数は日々に増していった。

中には遠く関東や西国から来て百日、半年、一年と通いつめる僧や武士たちもいる。彼ら

のうち、洛内に縁故がある者は其処から通ってくるが、縁故のない者も数多く、そのための宿所として樹木の間に別棟が建てられていた。

台所の広い土間に置かれたいくつかの窯には、薪が緒々とくべられて、大鍋に湯が湧いている。隅に置かれた薦からは蕪と青菜がはみ出していた。

樹木の明るい木漏れ日の中から急にうす暗い台所の戸口に立って、内部がよく見えない。薄暗いなかに人影が動いた。

「尼御前さま、お出でかね」弥太はもう一度人影に向かって声を掛けた。

ようやく暗がりに慣れてきた目に台所で働く通と蓮の姿が映った。

「通さんとお蓮じゃないか。尼御前さまはお出でかの」

「尼御前さまに何ぞ用かいの。今日は夕刻から法然様のご法話がありますよって、庭にお集まりの方々の様子を見に行っておられます

がの」

「行き違いやな」と弥太は奥のほうにきよろきよろと目をやりながら、

「ここに来る前に、わてらもちいつと表の具合を見て来たんやけどな。そもそも仰山な人で押すな押すなの騒ぎやった」

「都中のお方々が、道を求めて法然様を訪ねておいでですもん」桶で菜を洗っていたお通は、前垂れで手を拭いながら戸口に來るといった。

「ほんまやなあ。都のお方々だけやないで。このところは、そもそもあつちやこつちやのお方々が押しかけなさつとるからなあ」そういうと弥太はふたたび台所に目を走らせた。

「で、弥太さんは今日は何を持って来たんかいの。蕪かまどはこの間も仰山ぎやうさん買いましたよって、まだ間に合ってますわ」

「いや、今日は商いに来たんとは違うねん。先刻、尼御前さまには話を通じとるんやけど



な。何ぞ聞かんかったか」

弥太はそういうと後ろを振り返った。弥太が振り返ったので通と蓮が弥太の後ろに目を向けると、檜の樹の木蔭に十七、八の美しい娘がひっそりと佇^たっていた。

「あの娘は……」おどろいた通と蓮が同時に叫んだ。

「あの娘はやな」と弥太は頭に手をやりながら、

「わては一昨日^{おとつひ}かいな、何ぞええもん売つたらんやろか思^{おも}うて、東市^{ひがいち}に行^いきましたんや。蕪^わを持^もつて来^きました日^ひの翌日^{あけのひ}やつたわ。そこで墨^{すみ}売^うつとる婆^ばさんの店にも顔^{かほ}出^でしましてん。その時やな、婆^ばさんに吉水の台所^{だいしよ}にでも使^{つか}うて貰^{もら}えへんやろかいわれて、今日^{けふ}この娘を連れて来^きたんや」

尼御前^{あまごぜん}さまには早速一昨日^{おとつひ}のうちに頼^{たの}んで、草庵^{くさあん}で裏方^{うらほう}をお務^むめになる法蓮房^{はふれんぼう}さまのお許しも、尼御前^{あまごぜん}さまが頂^{いただき}てくださった、という弥太の説明によると、

東市で墨を商^{あきな}う婆^ばさんは近々^{まもなく}商^{あきな}いを止めて故郷^{こきやう}の越前^{えちぜん}に帰^{かへ}ることになったが、店で使^{つか}っていた娘を連れて帰^{かへ}ることはできず、弥太が長年、野菜などの商^{あきな}いに吉水の草庵^{くさあん}に出入^{しゆり}りしているの、相談^{さうだん}したのだという。

「この満^みいう娘も哀^{かな}れな娘^{むすめ}おや。婆^ばさんは何や平家^{へいけ}に関係^{かんけい}のある娘^{むすめ}やないかいとうつたけどな、幼^こいころの記憶^{きおく}を失^ううという話^わやつた」

「平家^{へいけ}ゆうたら、何ぞ恐^{おそ}ろしい目に遭^あうたんやろか」

「それもうこの八年。平家^{へいけ}ゆかりの方々^{かたがた}には恐^{おそ}ろしいこつばかりやつたからな」そういうと弥太は顔^{かほ}を歪^{ゆが}めた。

二

あれはもう、八年ほども前^{まえ}になろうか、一の谷^{いちのや}で討^うち死^しにした平家^{へいけ}一門^{いっもん}の首^{くび}を槍^{やり}に突^つき刺^さして、都大路^{みやこのぢ}を練^へり歩^あいた源氏^{げんじ}の侍^{さむらい}たちの首行^{くびぎ}列^り。その凄惨^{せいさん}な行列^{ぎやうり}を阿波^{あわ}の介^{すけ}とともに

垣間見てこの吉水に駆けつけ、腰を抜かして法然上人に訴えた日のことがはつきりと弥太の記憶に甦ってきた。

もちろん、事はそればかりではなかった。平家が壇ノ浦で滅亡した後もなお、今日にいたるまで、凄惨な残党狩りは続いていたのである。ぼつぼつと平家の残党が摘発されるたびに、賀茂の河原で衆人環視のどよめきのなかで処刑が行われていた。

平家が滅んだ文治元年（一一八五）、頼朝から京都守護に任命されて都に北条時政がやって来た時、時政は頼朝から、平家関係で子を身ごもっている女性の「腹を割いて男子かどうか検分せよ」と命じられているというもっぱらの噂が人々を震え上がらせた。あちこちでこれに類する惨劇が展開されていた。

一門の都落ちに同行せず、隠れ潜んでいる平家の男子を探しだして源氏方に通報した者には、多大な褒美を取らせる、と時政は都の大路小路に公示したのである。このお触れを

みて欲にかられ、平家とは何の関係もない庶民の男子で顔立ちの美しい子を、

「平家の公達です」

といって時政の許に突き出す町びとが相次いだ。突き出された子どもが親が泣き騒ぎ、

「この子はわてらの子で、決して平家のお子ではありまへん」

と訴える。すると突き出した町びとたちは、

「乳母がたわごとをいうて庇うとるんですわ。平家のお子どす。わてらよう知つとります」

と口々に言い募った。

「ええい、疑わしい子だ。首を斬れ」

時政の一声で、平家とは何の関係もない庶民の子が、首を斬られることが相次いだ。

三

「平家の方々はかりやないで。わてらかてはんまに末法の世に生きとるんや」表情を歪めて弥太はいった。

「ほんまになあ。で、満とやら、なして墨売りのばあさんとこで働いとったんや」通が訊ねた。

「それがな」

弥太が話だしたところによると、奥嵯峨野のさるお屋敷に、平家関係の奥方が四歳の若君と六歳の姫君とともに隠れ住んでおられたが、平家滅亡の翌年、密告する者があって、時政配下の侍たちが屋敷に押し寄せた時、抵抗した若君近侍の侍はその場で殺され、若君は時政のもとに連行されて斬首された。

そして奥方と姫君も自害して果てたという。「満ゆうこの娘はその屋敷跡に佇つとったそうや。三日も四日も佇ったまんまや。それに氣いついた近隣の爺さまがな、満に何を聞いても返事がないんや。こりゃ只事やない思うて、東市の墨売りの婆さまのところに連れて来たそうや」

「ふーん」蓮が感心したようにうなずいた。

「その爺さまは何で東市に連れて行つたんや



ろ」通がいった。

「そら、娘が平家ゆかりの者やったら、男では無うてもあとあとややこしいこつになる思うたんと違うか」

「ほんまになあ」

「婆さんはちようど人手が欲しいとこやっただんで、満を使うことにしたそうや。器量もいいしな。こんな娘を置いとったら、娘の顔見いに客も寄ってくるわな」

「年はいくつなんやろ」

通は後ろの木陰にひっそりと佇ったままの娘のほうを見て訊ねた。

「それが分からへん。何しろ奥方が隠れとった屋敷跡に佇とった以前の記憶が今もって無いんや。墨売りの婆のところに連れて来られたときは十歳くらいに見えたそうや」

「してみると、今は十八くらいかの」

「墨売りの婆は学があるからの。満月の満いう名前をつけたそうや。よう働く娘や言ううったわ」

弥太がそういうと通は、

「何時までも外に立たせといったら気の毒や。法蓮房さまにも話を通じとるんやったら、満とやら中にお入り」

そう通にいわれて、台所の戸口のところに遠慮がちに満が入ってきた。

「美しい娘や」

通がそう呟くのを聞いて弥太は満足そうに、「そんならわては阿波の介のそこに行ってくるわ」

というと出て行った。

弥太は阿波の介とはもう十年來の親しい付き合いなのである。もと陰陽師の阿波の介は、今、東国出身の道遍や道蓮とともに、法然上人のお身の回りの世話をしていた。

(つづく)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●響

〔特選〕潮騒太鼓島に響きて祭り来る

石原 新

潮騒という語は、鳥羽市神島を舞台にした、三島由紀夫の小説によって親しくなった。太鼓の名は小説以後につけたものだろう。今その祭り太鼓が鳴り出した。島を挙げての祭りである。太鼓は島中に鳴り響いているのだ。

〔佳作〕嗒り立つ荒波に耐え寒椿

佐藤 雅子

仏壇の鈴の残響春浅し

斉田 仁

電子辞書ピコピコ響き夜寒し

増田 信子

●流

〔特選〕上りやな築流れに透ける魚の群れ

中島富士子

鮎は年魚の名の通り、普通一年で生を終える。川に生まれた鮎は秋になって海に下り、春になると川に帰って卵を産む。その上り鮎

を捕るための罠である。群れをなして上つていく鮎に、流れはあくまでも澄んでいる。

〔佳作〕

春来ぬと流し目で言う男かな

鈴木真理子

立春の流れ見ている橋の上

山口 信子

流水の焚き火の煙海へ消ゆ

中村 真一

●自由題

〔特選〕

花見跡猫が寄り来るごみの山

浜口 佳春

花筵というが、この頃は何の風情もない青いシートが、あちこちに敷きつめられる。花見の後のごみは持つて帰るのが常識だが、酔っぱらうとその常識が変になってしまう。野良猫にとつてはありがたい餌場である。

〔佳作〕

味噌汁の葱青々と春立ちぬ

河合富美枝

寒満月海原遠く風ぎ渡り

井村 善也

ポストまで誰にも会わず風光る

池田 伊吹



底罪自由題

浄土誌上句会の
お知らせ

兼題
季節ではありませぬ

誌上句会〈編集部選〉

■響

春風や鐘の響きの南無阿弥陀
鐘の夜の火影彩る交響曲
鐘響く消えゆく先の野焼きかな
厳寒の孫の経に響きあり
掘り返す重機響きてひとり 冬
春昼や太鼓の響く廃校舎
テトラ打つ響きこもりし冬港
中島富士子
河合富美枝
前島格也
飯島英徳
鳥羽 梓
井村善也
斉藤幸雄

■流

笙の音にのりて流るる雛かな
佐藤雅子

締切・二〇一〇年五月二十日

発表・『浄土』二〇一〇年七月号

選者・増田河郎子（「南風」主宰）

応募方法

● いずれの題とも数の制限はありません。

● 特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■自由題

名水の流れゆたかに猫柳
母浄土光陰流れて我れ喜寿
さかのぼる流れもありぬ春立てり
流水の軋みて闇の軋みけり
春浅し流人のことき猫の顔
流水を拝んでいたる余寒空
風市の風が出払い流れ雲
立春の下駄ゆつくりと流れゆく
河合富美枝
飯島英徳
前島格也
斉田 仁
山内桃児
濱野具円
上目 裕
西原規夫

山門の灯入るる頃や山椿
引導を渡す私子も冴え返り
春光や一心一体みないのち
寒明の鏡のなかの非常口
立春の机の上は魚の色
冬晴れやバナナの如き犬を連れ
門灯を消し忘れたり春の雨
組板は立てて干すなり春隣
早春の豆腐屋多き町をゆく
立春や皿にずっとオムライス
中島富士子
佐藤雅子
前島格也
月島恭子
濱野具円
鳥羽 梓
山内桃児
工藤 掉
井口 栞
西原規夫

さっちゃんね

70 かい目

かまち♡おしろ



かまちおしろ先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日々新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日々新聞・新日本海新聞・山形新聞・長崎新聞・岐阜新聞・以上朝刊。中国新聞・神戸新聞、以上夕刊)



日中の犬の散歩も四月尽

岱潤

この春からNHKの朝の連ドラで、水木しげるの奥さんの半生を描いた自伝『ゲゲの女房』が始まった。

番組のオープニングで必ずゲゲの鬼太郎とその仲間たちが登場していて、鬼太郎世代である筆者はうれしくなる。そこで思わず本棚から九二年に発行された、岩波新書では珍しいカラー版の水木しげる著『妖怪画談』を捜して読んでしまった。ドラマの中でも登場した「べとべとさん」なども紹介されていて、正に水木ワールドといった本だが、その最後「奇想を楽しむ日々」という短文があ

り、興味深いことが書かれていた。「霊」という字を二つ書いて霊々（かみがみ）と読むわけで、本来神様も妖怪も幽霊さんも同じところの御出身だ」というのだ。これは本居宣長が神を迦微と書いて、尋常でないもの、すぐれたものとし、すぐれたるとは尊きことのみをさすのではなく、悪しきものというと解説していることと共通する。正に見えない世界は共通の世界なのだ。今回の連ドラのテーマは、何回か目のドラマの中でも言われていたが、「見えないけどある」と「こわいものはおもしろい」だと睨んだ。お通夜で「来迎」の話をされていて、思わずこのドラマのことが頭に浮かんだ。水木し

げるは最後に語っている。「我々のもとと『霊々の世界』からやってきたのであり、そして『霊々の世界』に去ってゆく存在なのだ」と。
(長)

編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十六巻五月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十二年四月二十日

発行 平成二十二年五月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一 東京港区芝公園四七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三二五七八六九四七

FAX 〇三三二五七八〇二六

振替 〇〇一八〇・八・八二二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
肱 博之(網代・寛安寺)
水科善隆(長野・教慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

歡かん喜ぎ踊ゆ躍やく

心身ともに歡び楽しむ
無量寿經

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

体験で心身は輝き、豊かな人生を実感する

へちま作りを始めて三年、やみ付きになりました。五月末頃種播きすると、気温が高くなる夏に一気に弦を伸ばして、実をつけ始めます。七、八十センチの濃い緑の太い円錐形の実が格好の被写体。それを抱えたお方の写真はいずれも満面の笑みを浮べて最適です。

九月初め頃表面が干からびて黄褐色、水分が減

って乾燥し、中の種がコロコロしたら、収穫期。皮を腐らせて、種を抜けば、長い糸瓜へちまたわしの完成です。へちまコロも一本の根から一升は取れます。いずれも最適な体験ですが、別の大発見をしました。へちまは自然が造る十二角の角錐体なのです。

へちま栽培のお陰で、心身充実しています。

法然上人鑽仰会の

本

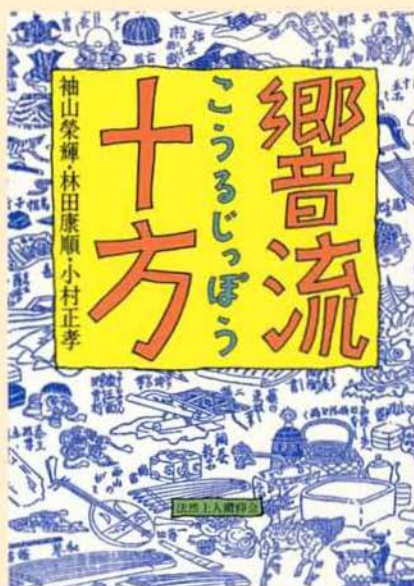
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう
600円(税別)

『差出人は法然さん』
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

巾顔装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
「選擇集絵解き物語」含む
20,000円(別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)500円



中浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠一巻本」より